

〔源氏物語五十二〕大將の君は、いとさしもいりたちなどし給はぬほどにて、はづかしう心ゆるる。びなき物にみな思たり、

〔日本書紀神代〕素戔嗚尊略。然後行覓將婚之處、遂到出雲清地焉。清地此云素戔嗚乃言曰、吾心コノココロ清清之。此今呼此

〔類聚名義抄六〕快苦壞反、心ヨシ、

〔倭訓栞中編八〕こ、ろよし。神代紀に快をよめり、情佳の義也。

〔日本書紀神代〕一書曰、略。以其稻種始殖于天狹田及長田、其秋垂穎八握、莫莫然甚快也。コトヨシ

〔源氏物語五〕若紫とはぬなどいふきは、ことにこそ侍なれ、心ウくもの給なすかな。略

〔伊勢物語上〕昔男有けり、女をとかくいふ事、月日へにけり、岩木にしあらねば、心ウぐるしとや思ひけん、やうく哀と思ひけり、

〔書言字考節用集九〕惆コロボシ。

〔空穂物語樓の上下〕かんの殿げにいとおかしげなり、はらからなどいひむつまじき人もなし、

心ぼそきに、心ざまなども、おもふやうにおはすなり、

〔古今和歌集九〕あづまへまかりける時、道にてよめる、

つらゆき

いとよる物ならなくに別ぢの心ぼそくもおもほゆる哉

〔新撰字鏡連字〕忙急務也、申略、怕呂毛止奈加留、

〔書言字考節用集九〕無マシ心ココロ元ハジメ、和俗所用、所出未詳

〔倭訓栞前編九〕こ、ろもとなし。伊勢物語に見ゆもとなしは、万葉集に見えたり、心に由縁なき

義にや、もとなはよしなと同じといへり、常に無心許とかけり、延陵季子が吾心已許之より出たるにや、謝靈運が詩に、延州協心許ともいへり。略